

プールと泳ぎと遊び

2012年7月 園長 片山喜章

いよいよプールの季節がやってきました。「プール」というとどうしても「泳ぎ」をイメージしがちになります。小学校では「体力づくりのために泳力を身につけること」「身を守るために物につかまって浮いたり、多少は泳げるようになること」が教育目標になっているとのことです。ですから一定の大きさのプールが設置されています。保育園の場合、さほど大きくないプールですから「水に慣れ親しむ」ために自由に遊ぶ時間が中心になります。自由に遊ぶなかで、子どもは自分と水のつきあい方をあれこれ試したり、自分自身に課題を設けてチャレンジしたりしようとする姿も見られます。ですから、プールという「楽しい環境」とともに「自由」をあたえることが保育として、とても価値のあることだをご理解ください。

もう一つ、私たちは、「水に慣れ親しむ」という基本的なねらいの他に「水という陸地ではない環境のなかで子どもどうしがかわり合うこと」も大切な目標にしたいと考えています。例えば、2人組でお馬さんごっこをすると友達のつるつるした背中に乗る経験ができますし、乗られる方も多少、浮力がはたらいているので少し軽い感覚を味わうことができます。2人組の手押し車も水中では陸上では経験できない非日常的な感覚を味わうことができます。

さらに1つのフープの中に4人くらいが“ぎゅーぎゅー”になって入って動き、足を取られそうになりながらも転ばないように力を合わせる経験もプールという限られた場所ならではのグループワークです。このようなプールという「環境を通した保育」のなかでも関係性が深まることを願っています。プールの中でみんなが一斉に同じ方向で駆け足をして渦巻をつくったり、綱引きをすることも豊かな経験になると確信して実践していきます。

このような保育園の実践を小学校につなげる保幼小連携から考えると、小学校の広いプールでは、水中アメフトや小グループでの簡単なシンクロの演技を自分たちで考えて取り組んだり、水中での鬼ごっこなど、子どもどうしがぶつかり合ったり、あれこれ考えてお互いを理解し合う協同性のある活動を期待します。そして、シーズンに1回くらいは服を着たままプールに入る経験があると良いと思っています。服を着たままだと体がかなり重た～くなります。ぼとぼとになった服のまま水の中を動き回ったり、友達を運ぶゲームをすると、裸のときは全く異なる窮屈な感覚を味わうにちがいません。その経験によって、水の楽しくも恐ろしい性質を体感できるような気がします。

このように「プール」＝「泳ぎ」という固定観念から脱して、子どもたちが多様・多彩な経験をしていくことが本来の保育・教育であるべきだと思うのですが、いかがでしょう。